

流暢性障害に対する一般的な人および専門家の態度に関するグローバルな視点

日本吃音・流暢性障害学会第11回大会

2023年10月21日

ケネス・O・セントルイス

ウエストバージニア大学

メールアドレス: ken.stlouis@mail.wvu.edu

I. 開示事項

A. 金銭面

- 複数の尺度 (POSHA-S など) の著作権を保有するポピュラーレ出版社の共同経営者
- 『Stuttering Meets Stereotype, Stigma, and Discrimination』 (2015年、WVU Press より出版。) という本の編集者/著者
 - この本の印税は非常に限定的だ
- www.teacherspayteachers.com で販売されている調査尺度の多数
 - 現在までの印税は限定的

B. 非金銭面

- Mary Weidner と私は POSHA-S/Child の共著者である
- Mary Weidner は InterACT プログラムの開発者である

C. 用語 (私は厳密に人第一言語を使用するわけではない)

II. 本プレゼンテーションで取り上げる内容

- 吃音の2本柱の概念
- 吃音に対する社会の態度を研究する根拠
- 成人および小児に対する社会の態度についてわかっていること、わかっていないこと
- 吃音に対する態度の国際差と予測因子
- 態度の変化について我々が学んだこと (いくつかの新しい知見を含む)
- 臨床的意義

III. 吃音の問題についての2本柱の概念

- 4つの構成要素 (ウェンデル・ジョンソンの相互作用仮説 [ただし吃音の原因ではない] から引用)
 - 話し手の吃音 (柱 I)
 - 話し手の吃音に対する話し手自身の反応 (柱 I)
 - 話し手の吃音に対する聞き手の反応 (柱 II)
 - 聞き手の反応に対する話し手の反応 (柱 II)
- 吃音の2本「柱」
 - 個人の柱 I
 - 根本的要因
 - 50~70%の遺伝的要因
 - 性比の違い

- (2) 脳の違い
- (3) 心理的、性格的、気質的要因など
- b) 異常な非流暢性
 - (1) 過度または異常な繰り返し、引き伸ばし、ブロックを特徴とする発話
- c) 随伴（二次）運動：吃音時の自発的な学習反応
 - (1) まばたき、大げさなジェスチャー、相づちなど

2. 社会の柱Ⅱ

- a) ステレオタイプ：個人を分類し、世界を理解するための近道を提供する、学習された知識構造
 - (1) ネガティブ（例：偏見）
 - (2) ポジティブ
- b) スティグマ：“汚名化されたアイデンティティ”；ネガティブな結果を招く「マーク」
 - (1) 公的スティグマ：社会で広く受け入れられている
- c) 差別：ステレオタイプ化され、汚名を着せられた人々に対して取られる行動（違法行動かもしれない）（B）
- d) 聴者の反応
 - (1) 笑ったり、冗談を言ったり、からかったり、いじめたり、言葉を埋めたり、「ゆっくりして」と忠告したり…
- e) 付属的（二次的）行動：聴者主導（現実か想像か）
 - (1) 目を合わせない、音・言葉・状況を逃避する、社交場面からの引き籠もるなど
- f) 情緒的反応
 - (1) 当惑、懸念、不幸、しんどい、恥ずかしい、不安、恐れ
- g) セルフスティグマ
 - (1) セルフスティグマ：マークされた個人に受け入れられる
 - (2) 社交不安、羞恥感、罪悪感、生活の質の低下、健康状態の悪化、医療へのアクセスの低下、寿命の低下、薬物/アルコール依存、自尽

IV. 社会の柱の探索：IPATHA initiative (1999-現在)

- A. 吃音に対する公的態度
 - 1. 一般民衆の視点、信念、反応、認識、知識、社交的距離、意識、同情心、考え方、ロールの罣、傾向など。
 - 2. ステレオタイプに招く公的態度，スティグマ と差別
- B. 二つの基本的問題
 - 1. 吃音に対する一般民衆の態度は世界各国で異なるのか？
 - 2. 吃音に対する態度を変えることができるのか？
- C. 態度に関する標準的な尺度が必要
 - 1. 開発したいいくつかのツール
 - a) Began with Public Opinion Survey of Human

Attributes-Stuttering (*POSHA-S*)

b) Instrument to measure public opinion (attitudes) about stuttering worldwide

c) Later added POSHAs for other conditions as well: cluttering, obesity & mental illness

d) Child version: *POSHA-S/Child*

e) Clinical version for stuttering: Appraisal of the Stuttering Environment (ASE)

2. ツールのダウンロード, 自動的分析 Excel ワークブック, ユーザーのガイドと IPATHA 書誌 on www.teacherspayteachers.com

D. 調査ツールの要素

1. 人口統計

2. 吃音

3. 吃音と比較するためのアンカー

a) *POSHA-S*

(1) 肥満

(2) 精神疾患

(3) 左利き

(4) 知能力

b) *POSHA-S/Child*

(1) 肥満

(2) 車椅子の使い

E. >300 以上の IPATHA パートナー

1. モデル: パートナーは *POSHA-S* を無料で使用・翻訳し、データベースを構築するために生データを私に送る。

F. 標準的なスコアリング規則

1. 項目 → 構成要素 → サブスコア → 全体の吃音 (または早口言語症など) スコア (OSS)

2. 平均値は-100 から+100 に変換

3. いくつかの項目スコアは反転

a) 高い=より良い態度; 低い=悪い態度

G. *POSHA-S* 世界のデータベース

1. 約 23,500 人の回答者から得られた 230 のサンプルがあり、51 の国と 11 の地域/大陸、32 の言語から

a) 各 3300 人の回答者による 55 のサンプル、事前と事後の比較 (介入&信頼性/コントロール) あり

2. 他の *POSHA* および ASE 国際データベースはより小さい

H. *POSHA-S* 要約レーダーグラフ

1. サンプルのサブスコアと構成要素を *POSHA-S* データベースのすべての以前のサンプル平均の最高、最低、中央値と比較

2. 信念

a) 特徴/人格

b) ~からの助け

c) 原因

- d) 潜在能力
- 3. 自己反応
 - a) 対応/助け
 - b) 社会的距離/共感
 - c) 知識/経験
 - d) 知識源
- 4. 肥満/精神疾患
 - a) 印象
 - b) なりたい/持ちる
 - e) 知識量
- 5. 全体の吃音スコア (OSS)
- V. サンプル比較からのいくつかの一般的な結果
 - A. すべてのサンプルにステレオタイプと偏見が存在する、最もポジティブなものでさえ
 - B. 一般の態度は影響を受けない…
 - 1. 様々な言語の翻訳
 - 2. 吃音の記述的定義または聴覚的モデル
 - C. 吃音に関する態度の重要な違いが関連している…
 - 1. 地域 (OSS 平均) (OSS の全サンプル平均の中央値=18)
 - a) POSHA-S データベース (2023 年 9 月) での地域別ランキング
 - (1) 北アメリカ (25)
 - (2) オーストラリア/ニュージーランド (25)
 - (3) 東欧 (23)
 - (4) 西欧 (22)
 - (5) カリブ海 (22)
 - (6) 東南アジア (16)
 - (7) アフリカ (13)
 - (8) 中東 (11)
 - (9) 南アジア (10)
 - (10) 東アジア (6)
 - b) 態度は各国内よりも各国間で、より似ている
 - c) 英国の学生に関する研究
 - (1) イギリス人学生: OSS = 31
 - (2) アラブ人学生: OSS = 21
 - (3) 中国人学生: OSS = 13
 - 2. 国
 - a) 最高から最低まで (選択済み)
 - (1) オランダ (45) & クロアチア (39): 1-2 サンプルのみ
 - (2) カナダ (29)、ノルウェー (29)、スウェーデン (29)、イスラエル (29)
 - (3) 米国(25):ほとんどのサンプルが含まれている。
 - (4) 日本(16): 4 サンプルのみ

(a) 一般人(-15)より吃音者 (+15)の方がポジティブ

(b) 中国のSLP 学生(18)より日本のSLP 学生(22)の方がポジティブ

(c) 日本のSLP 学生がクラタリングへの態度より吃音への態度の方がポジティブ

(5) 香港 (13)

(6) 中国 (10)

(7) 韓国 (1)

(8) イタリア(-1)

(9) クウェート (-2)

(10) シリア(-3)

D. 教育水準と他の社会経済的な要因

E. 確率標本抽出 と便宜的標本抽出

F. 選択された研究分野または職業 (例: SLP、ただし教職は除く)

G. 吃音またはその他の特性に関する過去の経験

H. その他の要因

1. 教育水準

2. 性別 (ジェンダー)

a) 不明確

VI. 一般的な人の態度の予測 (R^2 を用いて 37 変数の分散を説明する割合として用いる)

A. 信念と自己反応について、相違または正反対の予測

B. OSS の最も強い予測因子から最も弱い予測因子まで

1. 「強い」「相当強い」「やや強い」の予測値

a) 国(18.8%)

b) 言語 (16.8%)

c) 地域 (12.3%):最も有効である可能性が高い

d) 吃音への印象/なりたい (8.4%)

e) 人口(例:一般人、学生、SLPs、教師、他の専門家)
(5.6%)

f) 精神疾患の印象/なりたい (3.9%)

g) 吃音者への認識 (3.7%)

h) 左利きの印象/なりたい(2.9%)

i) 学ぶ能力 (2.3%)

j) 教育 (2.0%)

k) 話す能力 (2.0%)

2. 「疑わしい」「ほとんどない」の予測値

a) 自分のことを知能が高いだと思う (1.7%)

b) 不幸な人を助けることを優先する (1.1%)

c) 吃音を自覚している(0.9%)

d) 自分の信条を実践する(0.7%): マイナスの予測因子

e) 性別 (ジェンダー) (0.5%)

f) 心の健康 (0.4%)

- g) 年齢 (0.1%)
- 3. 無回答
 - a) パーティーや社交活動に参加する (0%)
 - b) 金を稼ぐことの優先度 (0%)
- VII. 吃音と肥満・精神疾患に対する態度の比較
 - A. POSHA-S, POSHA-0b & POSHA-MI (n = 各 500)
 - B. 態度の良いものから順に、肥満、吃音、精神疾患
- VIII. 吃音に対する否定的な態度はどのように生まれるのか
 - A. 子どもの習得 vs 吃音に対する両親の態度
 - B. 子どもの態度は未就学時点で最も悪く、5年生時点にかけて改善する
 - 1. アメリカ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ポーランド、ポルトガルで類似している
 - C. 両親の態度はどの学年においてもおおよそ同じ
 - 1. アメリカ、ボスニア・ヘルツェゴビナで類似している
 - D. 6年生(12歳)までに、子どもの態度は両親や祖父母、隣人のものに近づく(トルコでの研究)
- IX. 一般の態度の改善
 - A. 一般の態度改善のためにさまざまな介入が実施されてきた
 - 1. 介入方法：様々な組み合わせ
 - 2. ビデオ(商業目的および特注のもの)
 - 3. 印刷物
 - 4. 口頭発表
 - a) 雑談
 - b) 講演
 - c) 討論
 - 5. 吃音に関する内容
 - a) 定義/症状
 - b) 原因
 - c) 情動面
 - d) 吃音者への反応または吃音者との相互作用
 - e) 研究
 - f) すべきこととすべきでないこと
 - g) 個人的な体験
 - h) セラピー
 - B. 態度変容に関する最近の重要な知見
 - 1. いくつかの初期の研究：POSHA-Sの実験前後の平均変化量は約10単位
 - 2. 高校在学中に改善した態度は7年後まで持続した
 - a) 2008 OSS: 元のサンプル; 前 = 18; 後 = 44
 - b) 2015 OSS: 元のサンプルのサブセット = 36; 対照群 = 25
 - 3. 未就学児の態度は人形を用いた介入(Mary WeidnerのInterACT Program)で改善可能である
 - 4. OSS: 介入前 = 3; 介入後 = 15
 - C. 29人の若者及び成人を対象とした介入の成功事例

1. OSS の向上 = 9.4 単位 (範囲 = -1 [悪化] から +28 単位)
 - a) 人口統計学的変数は成功を予測しなかった
 - b) 介入の特徴には、予測可能性があった
 - (1) 高い関心または関与(対象者の気質、吃音者との交流など)
 - (2) 感情的なつながり
 - (3) 吃音に関する重要な(重要すぎない)情報
2. データソース
 - a) 29 の介入サンプルを 4 つの成功段階に分類(信念、自己反応、OSS を考慮)
 - (1) とても成功した (VS): ポジティブな変化 (≥5 単位) が 3/3
 - (2) 成功した (S): ポジティブな変化が 2/3
 - (3) わずかに成功した (MS): ポジティブな変化 が 1/3
 - (4) 成功しなかった(U): ポジティブな変化 が 0/3
 - b) 12 組の統制群または信頼性非介入サンプル(C/R)
3. 4 つの介入カテゴリーと非介入カテゴリーについて、事前、事後および事前から事後への変化を分析した。
 - a) 普遍的な統計的仮定: サンプルにおけるほとんどの対象者の変化は、サンプルの平均値の変化と似ている。
 - b) 各成功したカテゴリーにおいて、対象者は事前と事後の OSS による変化に応じて分類された。(例: 対象者 33a: 事前 = 15; 事後 = 22; 差 = +7)
 - (1) 肯定的な変化 (より良い態度) : > 5 単位以上
 - (2) 最小限の変化 (同じ態度) : -5~+5 単位
 - (3) 否定的な変化 (より悪い態度) : <-5 単位
4. 全体の結果
 - a) 介入による国民の態度の変化に関する多様なプロファイル
 - (1) 「クロスオーバー」効果がすべての介入と非介入カテゴリーで見られた (& ほとんどのサンプル)
 - (a) 最悪の態度 事前 → 最良の態度 事後
 - (b) 最良の態度 事前 → 最悪の態度 事後
 - (c) 中立の態度 事前 → 中立の態度 事後 (変化なし)
 - (2) 成功 vs 成功しなかった介入: 割合
変化-対象者の変化量とは関係ない
 - b) 吃音に対する態度を改善するために成功しそうな介入法と
 言えば、理想的には面白くて感情に基づいており、一般人が受け入れやすい有益な介入であること、変化に対してオープンな人々に行われるものでなくてはならない
 - (1) 最高の態度 (悪化する可能性がある) の 1/3 の人に、最初の印象は問題ないと納得させる
 - (2) 中間の態度 (変化がなさそう) の 1/3 の人に、現在の一般的な人の態度はもっと前向きであるべきであるという事を納得させる
 - (3) 最悪の態度 (あとは良くなるしかない) の 1/3 の

人に、最初の印象は往々にして間違っているのだと納得させる

c) それぞれのグループに対してどのように介入するかを考えることに挑戦する

(1) より多くの研究が必要である！

X. 臨床的意義：セルフスティグマの軽減

A. SLP(言語病理学家)は対象者の反応や行動を測定する尺度を提供する (例., OASES)

B. 現時点では

1. 治療における態度環境を考慮する
2. クライアント中心に基づくサポートを提供する

C. 今後の可能性

1. 約 2/3 の人の吃音態度は明らかな揺れがあることをから学ぶ
 - a) この揺れは変化の可能性を意味する
2. 社会的スティグマと自己スティグマの程度に応じて問題の判断を調整する
3. 介入プログラムの実施後による吃音者の生活の質の改善を記録する

D. 年齢とともに吃音態度の環境は変化される

1. 幼児期：両親、親戚、家族の友人の態度
2. 小学校・中学校：上記に加え、同級生、教師、コーチ
 - a) 学校：馬鹿にする人、からかう人、いじめる人
 - b) 学校：味方である親しい友人
3. 高校：上記のすべて+先輩+交際相手
4. 大学：家族、新しい友人、同級生、教授、交際相手
 - a) 通常にはからかい/いじめは少なくなる。
 - b) 成人期：配偶者の家族、友人、職場の同僚、上司/スーパーバイザー、世間一般のあらゆる層

E. 吃音の環境を測定する

1. 吃音の環境評価 (ASE)

- a) POSHA-S の第 2 試行バージョンと非常に似ている
- b) 個人差による微妙な変化を示すために、1-9 ポイントのスケールでスコアリングされたアイテムがさらに多く含まれている
- c) ASE は、POSHA-S と非常に似た吃音総合スコアを生成する
- d) 吃音者の家族の ASE スコアは、統制群よりもより肯定的である

2. ASE の臨床的な使用

- a) 吃音治療の前、中、後に、吃音のクライアントの親、配偶者、兄弟(姉妹)、および親しい友人に ASE を提供すること
 - (1) 家族の態度がクライアントに及ぼす影響とその逆の効果を実証する
 - (2) 吃音環境が予後に及ぼす影響に関するエビデンスを生成する

XI. クライアントへの支援に対する認識を考慮する

- A. 支援の評価に基づく肯定的または否定的な公衆の信念や反応の決定
- B. 吃音支援への個人的な評価につながったのは、
 - 1. 様々な翻訳がなされた数カ国における類似した結果
 - a) 一部の国での違い
 - 2. 三つのバージョン
 - a) 大人向け (*PASS-Ad*)
 - b) 子ども向け (*PASS-Ch*)
 - c) 保護者向け (*PASS-Par*)
 - 3. *PASS-Ad* 平均的な結果を選定
 - (1) 多くの回答者が、吃音者との交流に関する典型的な「すべきこと」と「すべきでないこと」に同意したが、全員が同意したわけではない
 - (a) 全ての項目は5段階評価の基準である (-2, -1, 0, +1, +2)
 - (2) ある吃音者に関連する直接的な行動
 - (a) 最高: 吃音の完治/軽減する方法を教えてほしい
 - (b) 中間: どのように助けられるか私に相談してほしい
 - (c) 最低: 吃音に関して冗談を言う
 - (3) ある吃音者に関連する間接的な行動
 - (a) 最も協力的: 例えば、言いたいことを言うまで待ってほしい
 - (b) 中立: 放っておく
 - (c) 最低の支援: 話すときに吃音の「フリ」をする
 - (4) 過去の支援
 - (a) 家族(最も勧めから順位): 母親、兄弟姉妹、父親、その他
 - (b) 学校(最も勧めから順位): 教師、クラスメート
 - (c) 学校(最も勧めから順位): 大学、高校、中学校、小学校
- C. 意義
 - 1. PASSはクライアントへの提供が可能である
 - a) クライアントの既往歴を取得するプロセスの一部
 - b) 脱感作と練習の対象を特定する
 - 2. 一般向けに翻訳可能なポスターを作成
 - (1) 現在、8ヶ国語に翻訳された

- D. ポスターに記載された証拠に基づく知見の要約.
1. 私と積極的に関わって下さい：自然なアイコンタクトを心がけて下さい！
 2. 忍耐強く：考えたり話したりするのに十分な時間を下さい！
 3. あなたが私を受け入れてくれることが大切です：偏見を持たないように心がけ、共感と思いやりを！
 4. 私を、フレンドリーでユーモアのセンスを持つ一人の人間としてサポートして下さい。そして、賞賛を！
 5. できるだけ気楽でいて下さい：自然に振る舞い、ありのままの自分で、私がどのように話すかではなく、私が何を言うかに集中して下さい！
 6. あなた自身のやりとりの修正を柔軟に行い、私が好む領域に敏感になって下さい！

参考文献

- St. Louis, K. O., Reichel, I., Yaruss, J. S., & Lubker, B. B. (2009). Construct and concurrent validity of a prototype questionnaire to survey public attitudes toward stuttering. *Journal of Fluency Disorders, 34*, 11-28.
- St. Louis, K. O., Lubker, B. B., Yaruss, J. S., & Aliveto, E. F. (2009). Development of a prototype questionnaire to survey public attitudes toward stuttering: Reliability of the second prototype. *Contemporary Issues in Communication Sciences and Disorders, 36*, 101-107.
- St. Louis, K. O., & Roberts, P. M. (2010). Measuring attitudes toward stuttering: English-to-French translations in Canada and Cameroon. *Journal of Communication Disorders, 43*, 361-377.
- Flynn, T. W., & St. Louis, K. O. (2011). Changing adolescent attitudes toward stuttering. *Journal of Fluency Disorders, 36*, 110-121.
- St. Louis, K. O. (2011). The Public Opinion Survey of Human Attributes-Stuttering (POSHA-S): Summary framework and empirical comparisons. *Journal of Fluency Disorders, 36*, 256-261.
- Özdemir, R. S., St. Louis, K. O., & Topbaş, S. (2011). Public attitudes toward stuttering in Turkey: Probability versus convenience sampling. *Journal of Fluency Disorders, 36*, 262-267.
- Özdemir, R. S., St. Louis, K. O., & Topbaş, S. (2011). Stuttering attitudes among Turkish family generations and neighbors from representative samples. *Journal of Fluency Disorders, 36*, 318-333.
- St. Louis, K. O. (2012). POSHA-S public attitudes toward stuttering: Online versus paper surveys. *Canadian Journal of Speech-Language Pathology and Audiology, 36*, 116-122.
- St. Louis, K. O., & Roberts, P. M. (2013). Public attitudes toward mental illness in Africa and North America. *African Journal of Psychiatry, 16*, 123-133.
- St. Louis, K. O., Przepiórka, A. M., Beste-Guldborg, A., Williams, M. J., Błachnio, A., Guendouzi, J., Reichel, I. K., & Ware, M. B. (2014).

- Stuttering attitudes of students: Professional, intracultural, and international comparisons. *Journal of Fluency Disorders*, 39, 34-50.
- St. Louis, K. O., Williams, M. J., Ware, M. B., Guendouzi, J., & Reichel, I. (2014). The *Public Opinion Survey of Human Attributes-Stuttering (POSHA-S)* and *Bipolar Adjective Scale (BAS)*: Aspects of validity. *Journal of Communication Disorders*, 50, 36-50.
- St. Louis, K. O., Sønsterud, H., Carlo, E. J., Heitmann, R. R., & Kvenseth, H. (2014). Public attitudes toward—and identification of—cluttering and stuttering in Norway and Puerto Rico. *Journal of Fluency Disorders*, 42, 21-34.
- Weidner, M. E., St. Louis, K. O., Burgess, M. E., & LeMasters, S. N. (2015). Attitudes toward stuttering of nonstuttering preschool and kindergarten children: A comparison using a standard instrument prototype. *Journal Fluency Disorders*, 44, 74-87.
- St. Louis, K. O. (Ed.). (2015). *Stuttering meets stereotype, stigma, and discrimination: An overview of attitude research*. Morgantown, WV: West Virginia University Press.
- St. Louis, K. O. (2015). Epidemiology of public attitudes toward stuttering. In K. O. St. Louis (Ed.), *Stuttering meets stereotype, stigma, and discrimination: An overview of attitude research* (pp. 7-42). Morgantown, WV: West Virginia University Press.
- St. Louis, K. O., Kuhn, C. D., & Lytwak, L. (2015). The *Appraisal of the Stuttering Environment (ASE)*: A new clinical tool to measure stuttering attitudes the client's environment. In K. O. St. Louis (Ed.), *Stuttering meets stereotype, stigma, and discrimination: An overview of attitude research* (pp. 255-273). Morgantown, WV: West Virginia University Press.
- St. Louis, K. O., Weidner, M. E., & Mancini, T. M. (2016). Comparing parents' and young children's attitudes toward stuttering. *Journal of Speech Pathology & Therapy*, 1, 104. doi:10.4172/jspt.1000104.
- St. Louis, K. O., Sønsterud, H., Junuzovic, L., Tomaiuolo, D., Del Gado, F., Caparelli, E., Theiling, M., Flobakk, C., Helmen, L. N., Heitmann, R. R., Kvenseth, H., Nilsson, S., Wetterling, T., Lundström, C., Daly, C., Leahy, M., Tyrell, L., Ward, D., & Węsierska, M. (2016). Public attitudes toward stuttering in Europe: Within-country and between-country comparisons. *Journal Communication Disorders*, 62, 115-130.
- Weidner, M. E., St. Louis, K. O., Nakıscı, E., & Özdemir, R. S. (2017). A comparison of attitudes towards stuttering of non-stuttering preschoolers in the United States and Turkey. *South African Journal of Communication Disorders* 64(1), 1-11, a178. <https://doi.org/10.4102/sajcd.v64i1.178> (Link to online article: <http://www.sajcd.org.za/index.php/sajcd/article/view/178>)
- Valente, A. R. S., St. Louis, K. O., Leahy, M., Hall, A., & Jesus, L. (2017). A country-wide probability sample of public attitudes toward

- stuttering in Portugal. *Journal of Fluency Disorders*, 52, 37–52. doi: [10.1016/j.jfludis.2017.03.001](https://doi.org/10.1016/j.jfludis.2017.03.001)
- St. Louis, K. O., Irani, F., Gabel, R. M., Hughes, S., Langevin, M., Rodriguez, M., Scott, K. S., & Weidner, M. E. (2017). Evidence-based guidelines for being supportive of people who stutter in North America. *Journal of Fluency Disorders*, 53, 1–13.
- St. Louis, K. O., Węsierska, K., Saad Merouwe, S., Melhem, N. A., Dezort, J., & Lacikova, H. (2018). *How best to support adults who stutter according to international evidence-based guidelines*. Poster or flier. University of Silesia, Katowice, Poland. Available online in open access: (PASS-Adult): <https://www.logolab.edu.pl/wp-content/uploads/2021/02/%E2%80%9EJak-najlepiej-wspierac-dorosle-osoby-jakajace-sie-Inne-jezyki.pdf>
- St. Louis, K. O., & Flynn, T. W. (2018). Maintenance of improved attitudes toward stuttering. *American Journal of Speech-Language Pathology*, 27, 721–736. doi:10.1044/2017_AJSLP-17-0146
- St. Louis, K. O., & Weidner, M. E. (2018). Test-retest reliability of the *POSHA-S/Child* in 4-11 year old schoolchildren. *Canadian Journal of Speech-Language Pathology and Audiology*, 42, 41–54.
- Weidner, M. E., St. Louis, K. O., & Glover, H. L. (2018). Changing nonstuttering preschool children's stuttering attitudes. *American Journal of Speech-Language Pathology*, 27, 1445–1457.
- Glover, H. L., St. Louis, K. O., & Weidner, M. E. (2019). Comparing stuttering attitudes of preschool through 5th grade children and their parents in a predominately rural Appalachian sample. *Journal of Fluency Disorders*, 59, 64–79.
- St. Louis, K. O., Węsierska, K., Saad Merouwe, S., Melhem, N. A., Dezort, J., & Laciková, H. (2019). How should we interact with adults who stutter? Let's hear from them. In D. Tomaioli (Ed.). *Proceedings of the 3rd International Conference on Stuttering* (pp. 172–183). Trento, Italy: Erickson.
- St. Louis, K. O., Myers, L. E., Barnes, M. F., Saunders, M. A., Hall, B. M., & Weidner, M. E. (2019). Oral face-to-face versus online administration of the *POSHA-S/Child*. *Perspectives of the ASHA Special Interest Groups*, 4, 1337–1343. doi.org/10.1044/2019_PERSP-19-00122
- St. Louis, K. O., Węsierska, K., Przepiórka, A., Błachnio, A., Beucher, C., Abdalla, F., Flynn, T., Reichel, I., Beste-Guldborg, A., Junuzović-Žunić, L., Gottwald, S., Hartley, J., Eisert, S., Johnson, K., Bolton, B., Teimouri Sangani, M., Rezai, H., Abdi, S., Pushpavathi, M., Hudock, D., Spears, S., & Aliveto, E. (2020). Success in changing stuttering attitudes: A retrospective study of 29 intervention samples. *Journal of Communication Disorders*, 84, 1–18. 105972. doi.org/10.1016/j.jcomdis.2019.105972

- Weidner, M. E., Junuzović-Žunić, L., & St. Louis, K. O. (2020). A comparison of stuttering attitudes among nonstuttering children and parents in Bosnia & Herzegovina. *Clinical Archives of Communication Disorders*, 5, 42-53. <https://doi.org/10.21849/caed.2020.00199>
- St. Louis, K. O. (2020). Comparing and predicting public attitudes toward stuttering, obesity, and mental illness. *American Journal of Speech-Language Pathology*, 29, 2023-2038. https://doi.org/10.1044/2020_AJSLP-20-00038
- Sønsterud, H., Węsierska, K., Skogdal, S., Åmodt, K., Boron, A., Michta, I., Sakwerda, A., Pakura, M., St. Louis, K. O., Weidner, M., & Ilaszczuk, A. (2021, September). How best to support children who stutter in interpersonal communication? What is and what is not supportive in the view of children who stutter and their parents (Leaflet). *LOGOLab - Dialogue without barriers*. Chorzów, Poland: Agere Aude Foundation for Knowledge and Social Dialogue. Available online in open access: (PASS-Adult):https://www.logolab.edu.pl/wp-content/uploads/2021/03/LOGOLab_leaflet_both_pages_final.pdf
- Weidner, M. & St. Louis, K. O. (2023). Changing public attitudes toward stuttering. In H. Sønsterud, & K. Węsierska (Eds.) *Dialogue without barriers - A comprehensive speech therapy intervention in stuttering* (English Version). Chorzów, Poland: Agere Aude Foundation for Knowledge and Social Dialogue. <https://www.logolab.edu.pl/dialogue-without-barriers-a-comprehensive-approach-to-dealing-with-stuttering-english-version/>
- Węsierska, K., & Weidner, M. (2022). Improving young children's stuttering attitudes in Poland: Evidence for a cross-cultural stuttering inclusion program. *Journal of Communication Disorders*, 96, 106183. doi: 10.1016/j.jcomdis.2022.106183
- Weidner, M., Węsierska, K., Laciková, H., Sønsterud, H., Skogdal, S., Åmodt, K., Scaler-Scott, K., & Coleman C. (2022). Osobista ocena polskich, słowackich i amerykańskich dzieci jākających się na temat uzyskiwanego wsparcia [Personal appraisals of support from the perspective of Polish, Slovak, and American children who stutter]. *Logopaedica Lodziensia*, 6, 275-294.

本資料は、St. Louis 先生が作成された原版に基づき、以下の筑波大学学生が日本語訳を担当し、澤井雪乃氏 (Master of Speech Pathology, College of Nursing and Health Sciences, Flinders University) の協力を得て作成しました。

- ・筑波大学大学院 人間総合科学研究群 障害科学学位プログラム博士後期課程
黄金峰 陳愈安 青木瑞樹 何橙棋 Badmaavanchig Zolzaya
- ・筑波大学大学院 人間総合科学研究群 障害科学学位プログラム博士前期課程
浅子綾美 陳宣伶
- ・筑波大学人間学群障害科学類
小山田琴美 橋口拳 松本愛子 村山翔野 茂呂公比古 田中京花
- ・筑波大学医学群医学類
遠藤優